

2024 年度 Fieldnet ラウンジ企画

交差する生活：

東アジア 3 国におけるムスリム移民の生活実践と社会的ダイナミクス

報告書

- 企画責任者：小宮理奈（東京都立大学大学院）
- アドバイザー：澤井充生（東京都立大学）
- 日時：2025 年 2 月 8 日（土）13:00-17:00
- 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

- 本企画の趣旨

現在、日本、韓国、台湾を含む東アジア諸国では、ムスリム移民の数が増加している。2020 年の時点で、日本には約 23 万人のムスリムが居住しており、韓国でも移民労働者や留学生を中心にムスリム人口が増加している。また、台湾はインドネシアからの移民を多く受け入れている。

日本におけるムスリム移民に関する研究はすでに多く蓄積されているが、移民研究やムスリム移民に関する議論では、しばしばヨーロッパの事例が比較対象とされる傾向がある。しかし、日本、韓国、台湾の 3 カ国を横断的に比較し、ムスリム移民の受け入れや社会的ダイナミクスを検討する試みは十分に行われていないのではないかと考える。

本シンポジウムでは、ムスリム移民の日常的な実践と社会的ダイナミクスに焦点を当て、東アジアにおける共通点や相違点を明らかにするとともに、移民自身の視点や研究者の分析を交えながら議論を深めることを目的に開催した。

- プログラム

13:00 - 13:05 Fieldnet からの挨拶

13:05 - 13:10 趣旨説明 小宮理奈（東京都立大学大学院）

13:10 - 13:30 岡井 宏文（京都産業大学）

「日本のイスラーム社会の概要：マスジドの活動に注目して」

13:30 - 13:50 ホサイン・タンジーナ（東京都立大学大学院）

「在日ムスリムとして生きる：社会人と学生の経験から」

13:50 - 14:00 休憩

14:00 - 14:40 イ・ソジョン（韓国・西江大学校）

「Lives of Muslim Migrant and Their Acculturation in Korea（韓国におけるイスラム系移民の生活と文化的適応）」*逐次通訳あり

14:40 - 15:00 奈良雅史（国立民族学博物館）

「もつれ合うエスニシティと宗教性：台湾におけるムスリム・コミュニティの動態」

15:00 - 15:10 休憩

15:10 - 15:40 <ゲストレクチャー1（オンライン参加）>

長谷川ルリカ（NPO 法人 Human Welfare Association）

「ロヒンギャ系日本人として」

15:40 - 16:10 <ゲストレクチャー2>

崔炳潤（高麗寺国際霊園代表）

「宗教宗派民族国籍を超える土葬霊園」

16:10 - 16:20 休憩

16:20 - 16:50 パネルディスカッション

「ムスリム移民に対する社会的認識、イスラモフォビア、レジリエンス」

ファシリテーター：小宮理奈（東京都立大学大学院）

パネラー：岡井 宏文（京都産業大学）、ホサイン・タンジーナ（東京都立大学大学院）、イ・ソジョン（韓国・西江大学校）、奈良雅史（国立民族学博物館）、長谷川ルリカ（NPO 法人 Human Welfare Association）、崔炳潤（高麗寺国際霊園代表）

16:50 - 17:00 閉会の挨拶

- 発表要旨

1. 「日本のイスラーム社会の概要：マスジドの活動に注目して」

岡井 宏文（京都産業大学）

岡井宏文氏は、日本のムスリム人口の推計、マスジドの活動の現状、そしてイスラーム社会の実態把握における課題について論じた。

発表の前半では、日本のムスリム人口に関する推計を紹介した。2023 年末時点で、日本に住むムスリムの推計人口は約 35 万人であり、そのうち 29.4 万人が外国籍、5.4 万人が日本国籍である。ムスリム人口は近年急増しており、特にインドネシア、バングラデシュ、パキスタンなどの出身者が多い。加えて、日本国籍を持つムスリムも増加しており、主に婚姻、帰化、新規入信などが要因となっている。岡井氏は、日本のムスリム人口が多国籍・多世代化し、地方への分散も進んでいることを強調した。

次に、日本のマスジドの活動について論じた。現在、日本には 170 カ所以上のマスジドが存在し、その多くは 1990 年代以降の移民第一世代によって設立された。特に、パキスタン、バングラデシュ出身者による設立が多く、運営資金は主に国内のムスリム・コミュニティからの寄付によって賄われている。しかし、近年ではインドネシア、マレーシア、スリランカの出身者や、日本人など、設立者の多様化が進んでおり、資金調達の手法も海外からの支援を含めて広がっている。

また、マスジドの社会的役割についても説明した。マスジドは単なる礼拝の場ではなく、宗教教育、葬儀、相互扶助、地域社会との交流など、さまざまな機能を担っている。近年では、ムスリム向けの学校設立、埋葬対応（湯灌施設・土葬墓地の確保）、災害支援といった新たな活動も展開されており、マスジドが移民コミュニティのセーフティネットとして機能していることが示された。特に、2024 年の能登半島地震では、金沢ムスリム協会や富山マスジドが救援物資の提供や避難所の開放を行い、ムスリムだけでなく地域住民への支援も行ったことが紹介された。

発表の後半では、イスラーム社会の実態把握の課題について論じた。日本のムスリム社会は、マスジドやイスラーム団体を中心に語られることが多いが、実際には組織に属さないムスリム（non-organized Muslims）の方が多数派であり、彼らの実態を把握することが難しいと指摘した。

最後に、岡井氏は、日本のムスリム社会の多様性をより正確に把握するためには、マスジドや団体の研究だけでなく、個々のムスリムの宗教実践やアイデンティティに関する研究が必要であると述べ、発表を終えた。

2. 「在日ムスリムとして生きる：社会人と学生の経験から」

ホサイン・タンジーナ（東京都立大学大学院）

発表の前半では、在日バングラデシュ人ムスリムに関する先行研究を取り上げた。日本におけるバングラデシュ人の移住の歴史や人口動向、居住地域の特徴について整理し、バングラデシュ人がどのように日本社会に適応してきたのかを示した。特に、東京都北

区東十条に形成された「リトル・ダッカ」と呼ばれるコミュニティに言及し、モスクやハラール食材店など、宗教・文化的要素が地域社会にどのように根付いているかを説明した。また、バングラデシュからの移住が 1970 年代以降どのように変化してきたのかについても触れた。

次に、在日ムスリムに関する先行研究をもとに、日本におけるムスリム移民の受け入れ状況や異文化適応の課題について考察した。特に、ムスリム女性が直面する宗教的・文化的な制約、職場や教育環境における多様性の受容について、既存の研究成果を基に説明した。

発表の後半では、ホサイン・タンジーナ氏自身の経験について語った。2019 年に来日し、大学で学ぶ傍ら、空港や厚生労働省の水際対策施設でアルバイトを経験したことを紹介した。日常生活では、日本社会の寛容さを感じるが多かった一方、就職活動を通じて自らの宗教的アイデンティティを強く意識するようになったという。ムスリム女性として、ヴェールの着用がアルバイトの選択肢を狭める要因となることや、職場での理解の不足についても言及し、日本社会におけるムスリム女性の立場について自身の視点を共有した。また、ムスリム・コミュニティ内部における価値観の違いについても触れた。ヴェールを着用するかどうかによって他のムスリムから批判を受けるケースがあること、信仰のあり方について周囲から強制されることがあることなど、ムスリム社会内部での多様性と課題について指摘した。

最後に、日本社会におけるムスリムの受容に関して、礼拝所の設置やハラール食の提供など、環境整備が進んでいる一方で、文化的・宗教的な理解には課題が残っていることを強調した。自身の経験と研究の知見を交えながら、多文化共生の在り方について考察し、発表を締めくくった。

3. 「Lives of Muslim Migrant and Their Acculturation in Korea (韓国におけるイスラム系移民の生活と文化的適応)」

イ・ソジョン (韓国・西江大学校)

イ・ソジョン氏の発表は、韓国におけるムスリム移民の現状と社会適応の課題について論じた。

発表の前半では、韓国のムスリム移民の人口推計と特徴を説明した。韓国におけるムスリム移民の歴史は比較的浅く、現在のムスリム人口は約 20 万人と推定されている。移民の出身国は中央アジア、南アジア、東南アジアが中心で、アラブ系ムスリムは少数

派である。また、韓国内には約 150～200 のモスクやムッサラが存在するが、シーア派の礼拝所は極めて少ないことを指摘した。

続いて、韓国社会におけるムスリム移民の可視化と社会的反発について論じた。2001 年の 9.11 テロ以降、韓国でもイスラモフォビアが広がり、2004 年の韓国人拉致・殺害事件、2018 年のイエメン難民問題、2021 年の大邱モスク建設紛争などが社会的議論を呼んだ。特に、大邱では当初地元住民の反対にとどまっていたが、メディア報道を契機にキリスト教保守派や極右団体が介入し、反ムスリム感情が全国的に広がったことを指摘した。

発表の後半では、ムスリム移民の宗教実践とアイデンティティの変容について考察した。韓国のムスリム移民は、母国の宗教文化を維持しながらも、社会適応の過程で内部対立を経験することがある。例えば、COVID-19 の際には韓国政府ではなく母国の指示に従うケースも見られた。また、ザカートを母国に送る傾向がある点についても指摘した。

最後に、イ氏は、韓国社会がムスリム移民と共生するためには、教育や対話を通じた相互理解の促進が不可欠であり、韓国独自の移民受け入れ体制の整備が求められると述べ、発表を終えた。

4. 「もつれ合うエスニシティと宗教性：台湾におけるムスリム・コミュニティの動態」

奈良雅史（国立民族学博物館）

奈良雅史氏は、台湾のムスリム・コミュニティの変遷と現状について、歴史的背景や社会的受容、民族的・宗教的関係を踏まえて論じた。

発表の前半では、台湾におけるイスラモフォビアの有無について言及し、イスラームに対する無理解は存在するものの、台湾がムスリム移民を比較的うまく包摂してきたと指摘した。例えば、ラマダーン明けのイード・アル＝フィトルの際に、インドネシア人移民労働者が台北駅に集まることに對し、「政府は別の集会場を提供すべき」といった意見が出たが、露骨なヘイトスピーチは少ないという点が特徴的である。

続いて、外国人ムスリムの包摂と課題について考察した。台湾のムスリム・コミュニティは少子高齢化が進む中、1990 年代以降に増加したインドネシア人ムスリムの参加によって活性化してきた。しかし、モスクの運営は主に 1949 年に移住した中華系ムスリムが担い、インドネシア人ムスリムは独自のコミュニティを形成することが多い。奈良氏は、台湾最大のイスラーム組織である中国回教協会が、インドネシア人ムスリムをどのように包摂してきたのかが十分に議論されていない点を指摘した。

発表の後半では、台湾におけるムスリム・コミュニティの歴史について詳述した。台湾のムスリムは、明末清初に福建省などから移住し、1949 年には国民政府と共に多くの中華系ムスリムが流入した。さらに、1980 年代以降にはミャンマーやタイ北部からの雲南系ムスリムが増え、台湾のイスラームの再生産に重要な役割を果たしたことを示した。というのも、台湾ではイスラーム学校が存在せず、宗教指導者の養成が困難であったため、雲南系ムスリムとのネットワークを頼ってミャンマーやタイ北部から宗教指導者を招聘してきたためだ。トルコのイスラーム団体が 2019 年にイスラーム学校を設立したものの、宗教指導者を輩出する段階には至っておらず、雲南系ムスリムに依存する状況が続いている。また、宗教活動を支えるインドネシア人ムスリムの役割についても触れた。中華系ムスリムの高齢化により、祭礼や葬儀の運営はインドネシア人ムスリムなしでは成り立たなくなっている。例えば、マウリド（預言者ムハンマド生誕祭）の共食や片付けを担うのは主にインドネシア人ムスリムであるが、儀礼の言語は中国語で行われるなど、彼らが周縁的な位置にあることが指摘された。

最後に、奈良氏は、台湾のムスリム・コミュニティが「中国的なもの」と「イスラーム的なもの」のもつれ合いの中で形成されていることを示した。マウリドの実施が「漢化」の結果として批判される一方で、それを支えるインドネシア人ムスリムの中には、イスラーム復興運動の影響を受けた敬虔なムスリムも多く存在する。このように、台湾におけるムスリムの宗教性と民族性は単純に融合するのではなく、時に緊張関係をはらみながら共存していることを指摘し、発表を締めくくった。

- ゲストスピーカー講演要旨

1. 「ロヒンギャとして生まれ、日本で生きる」

長谷川ルリカ（NPO 法人 Human Welfare Association）

長谷川ルリカ氏は、ロヒンギャの歴史、アイデンティティ、無国籍問題、そして多文化共生の課題について自身の経験を基に語った。講演の前半では、ロヒンギャの歴史的背景を説明し、ミャンマーにおけるロヒンギャの位置づけや、過去の迫害の経緯について述べた。特に、政府による国籍剥奪、移動制限、差別政策などがロヒンギャの生活に深刻な影響を与えていることを強調した。次に、自身の生い立ちと日本への移住について語った。ミャンマーラカイン州での生活からヤンゴンへの移住、そして 2001 年の来日、日本国籍取得までの過程を説明し、日本社会での適応や直面した困難について述べた。特に、学校生活における文化的な違い、食習慣、アイデンティティの葛藤について触れた。

後半では、無国籍問題や在日ロヒンギャ・コミュニティの現状について説明した。日本における無国籍者の課題として、法的地位の不安定さ、教育や就労の制限、社会的認知の低さが挙げられ、これらの解決に向けた支援の必要性を訴えた。また、自身が関わる支援活動についても紹介し、在日ビルマ・ロヒンギャ協会、NPO 法人「無国籍ネットワーク」、NPO 法人「Human Welfare Association」などの取り組みを説明した。これらの活動を通じて、ロヒンギャのアイデンティティの確立と、日本社会における理解促進を目指していることを強調した。最後に、日本社会における多文化共生の実現に向け、相互理解の促進や無国籍問題の解決に向けた取り組みの必要性を述べ、講演を終えた。

2. 「宗教宗派民族国籍を超える土葬霊園」

崔炳潤（高麗寺国際霊園代表）

崔炳潤氏の講演では、自身の生い立ちから社会正義の実践、そして高麗寺の再建と土葬墓地の開設までの歩みについて語られた。

講演の前半では、1940 年に和歌山県で生まれ、大阪での青春時代を経て、自動車整備業を立ち上げた経緯が語られた。若い頃の苦難を乗り越えながら、「社会正義を実践するためには実力が必要」との信念を持ち、交通事故や公害問題の解決、地域のための活動に尽力した経験が紹介された。

講演の中盤では、高麗寺との関わりと再建の過程について述べられた。仏教徒だった母の影響で寺院に関わるようになり、高麗寺が経営難や内部対立に直面する中で、独自の資金と行動力で寺院の存続に奔走したことが強調された。裁判や債務整理など、多くの困難を乗り越えながら、高麗寺を再建し、運営を立て直してきた経緯が語られた。

後半では、宗教・国籍を超えた土葬墓地の開設について話された。火葬が一般的な日本において、土葬を望む人々の受け入れ先がない現状を知り、宗教・宗派・国籍を問わず利用できる国際霊園を開設するに至った。ムスリムをはじめ、カトリック、キリスト教、仏教など、多様な背景を持つ人々が契約し、現在では日本全国から関心が寄せられている。また、自身が在日韓国人として差別を経験したことから、「自分が受けた差別を他者に向けるのではなく、助け合うことが大切だ」という理念を持ち、土葬墓地の開設を通じて多文化共生の実現に貢献したいとの思いを語った。

● パネルディスカッション概要

限られた時間ではあったが、登壇者それぞれが互いの研究発表を踏まえた所感を述べ、3 カ国のムスリム移民に関する共通点や相違点について議論を深めた。特に、日本・韓国・台湾におけるムスリム移民の受け入れ政策や社会的認識の違いに注目し、それらを比較研究する意義について意見が交わされた。比較を通じて、各国の宗教的・文化的背景の違いがムスリム移民の適応や共生の在り方にどのような影響を与えているのかが明らかになり、こうした視点を持つことの重要性が強調された。また、質疑応答では韓国における韓国人ムスリムの現状と台湾におけるインドネシア人ムスリムの社会的立場についての質問が寄せられた。



パネルディスカッションの様子

- 本企画の意義と課題

本ラウンジは、東アジアにおけるムスリム移民の現状と社会的ダイナミクスを比較研究する場として、大きな意義を持つ機会となった。日本・韓国・台湾の3カ国におけるムスリム移民の受け入れや社会的認識の違いを明らかにし、それぞれの歴史的背景や政策、地域社会の反応を比較することで、より広い視野から議論を深めることができた。

特に、本ラウンジでは、研究者のみならず、ムスリム移民や地域社会の当事者の声を取り入れた点が大きな特徴であった。統計や政策の分析だけでは捉えきれない、移民一人ひとりの経験や社会適応の過程を共有することで、移民研究におけるリアリティと多

様性の重要性が浮き彫りになった。また、学術的議論にとどまらず、社会正義や多文化共生の観点から、地域社会との関係構築や相互理解の必要性についても考察がなされた。

さらに、イスラモフォビアやムスリム移民の可視化と社会的反発、宗教実践とアイデンティティの変容など、各国で共通する課題とそれぞれ異なる対応策が議論されたことで、比較研究の意義が改めて確認された。韓国のモスク建設をめぐる対立や、台湾におけるインドネシア人ムスリムの増加、日本のハラール対応や土葬問題といった具体的な事例を通じて、移民受け入れの多様な形とその課題が明確になった。

また、本ラウンジのもう一つの重要な特徴は、異なるバックグラウンドを持つ研究者が参加し、学際的な視点から議論が行われたことである。社会学、文化人類学、地域研究、移民研究など、さまざまな分野の専門家が集まり、異なるアプローチでムスリム移民の課題を検討した。比較研究だけでなく、学際的な視点を取り入れたことで、移民問題をより総合的に理解するための新たな視点が提示された。

本ラウンジは、学際的かつ実践的な視点を融合させ、多角的にムスリム移民の現状を考察する貴重な場となった。比較研究を通じて各国の特徴を明らかにするだけでなく、当事者の視点を取り入れながら、今後の研究の方向性や政策提言の可能性を探る機会となったことは大きな意義がある。

一方で、今回のラウンジは導入的な意味合いが強く、各国における現状の概要を示す発表が中心となった。そのため、より深い分析や横断的な比較を行うには、今後の研究に向けた工夫が必要である。例えば、次回以降は特定のテーマを設定し、各国の共通点や相違点をより詳細に掘り下げる形で議論を展開することが求められる。また、発表形式も単なる現状報告にとどまらず、共同研究の形をとることで、より体系的な比較や理論的な枠組みを確立することができるだろう。

さらに、今回の議論では、ムスリム移民を取り巻く社会的ダイナミクスが強調されたが、移民自身の声や個別の生活実践については、まだ十分に掘り下げられたとは言い難い。今後は、より多くの移民当事者の参加を促し、彼らの経験や語りを分析に取り入れることで、より実証的かつ当事者主体の研究を推進する必要がある。

本ラウンジの成果を踏まえ、次の段階では、特定の横断的テーマを設定し、共同研究や発表を通じてさらなる比較分析を行うことで、より深い知見を得ることが求められる。今回の議論を起点とし、今後の研究がより発展的な形で継続していくことを期待したい。

- 謝辞

本ラウンジ企画を無事に実施することができたのは、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）の皆様のご支援とご尽力のおかげである。準備段階から当日まで、多方面にわたりご協力をいただき、心より感謝申し上げる。不慣れな点も多くご迷惑をおかけしたが、皆様のご支援により円滑に運営することができた。

特に、企画の初期段階から当日の進行や運営を支えてくださった Fieldnet ご担当の皆様に厚く御礼申し上げます。

本ラウンジ企画には、発表者・通訳を含め 35 名の参加があり、研究者のみならず一般の方々の参加も多く見られた。このことは、本テーマへの関心の高さを示すとともに、学術研究と社会との接点を広げる重要性を改めて認識させるものであった。今後も本テーマに関する研究を深化させ、学術的・社会的な議論の発展に寄与できるよう努めていきたい。